65th RECITAL 【1997 年（平成 9 年） 1 月 19 日/2 月 1 日】

人見記念講堂/ザ・シンフォニーホール

2nd Stage

男声合唱組曲「雪と花火」

片恋
彼岸花
芥子の葉
花火

作詩　北原　白秋
作曲　多田　武彦
指揮　吉岡　裕記

男声合唱組曲「雪と花火」

組曲『雪と花火』について

多田　武彦

1957年（昭和32年）初めて東京に移り棲み、四畳半一間の新婚生活が始まった。

当然、生活状況も楽ではなく、休日の天気の良い日などには、「起伏に富んだ山手の町並み」や「明治大正時代への郷愁を感じさせる下町の露地など」を散策するのが、唯一の楽しみであった。

初めての東京住まいでもあり、東京の風物への印象を合唱組曲の形で残しておこうと、詩人北原白秋先生の詩集『東京景物詩』（後に『雪と花火』に改題）に題材を求め、組曲『雪と花火』を作曲した。

私が好んで聴く「ドビュッシーの前奏曲第二巻」の終曲「花火」にあやかって、白秋先生の描く「両国の川開き」を、この頃世に出た山下清画伯の貼り絵「両国の花火」にオーバーラップさせながら、終曲に「花火」を配置した。

また、第二曲目の「彼岸花」では、「どうせ、湿地の彼岸花／蛇がからめば身は細る」のくだりで、悲しい遊女の姿を凝視していた詩人の視野が、「どうせ、湿地の彼岸花／午後の三時の鐘がなる」のくだりでは、まるで映画のズームアウトのように、あたりの景観までも包み込んでいくような思いがして、北原白秋の詩情の見事さに感動しながら、曲づくりをしていった記憶がある。

♯　　♭　　♪

創部以来、北原白秋の詩による様々な音楽の名演奏をされてきた関西学院グリークラブによって、彫りの深い白秋の世界と、『雪と花火』に綴られている大正ノスタルジァが、今日、しみじみと描かれることだろう。

演奏会のご成功を、心からお祈りする。